

約束の旅路

2007(平成19)年3月8日鑑賞(東宝東和試写室)

★★★★



監督・原案・共同脚本＝ラデュ・ミヘイレアニュ／出演＝モシェ・アガザイ／モシェ・アベベ／シラク・M・サバハ／ヤエル・アベカシス／ロシュディ・ゼム／ミミ・アボネッシュ・カバダ／マスキ・シュリブウ・シーバン／イツァーク・エドガー／ロニ・ハダー／ラミ・ダノン（カフェグルーヴ、ムヴィオラ配給／2005年フランス映画／149分）

第2章

面白くてためになる

……アフリカ大陸のエチオピアには、黒人のエチオピア系ユダヤ人がいる。それが「ファラシャ」。そして彼らは、太古の昔より聖地エルサレムへの帰還を望んでいた……。モーゼの『十戒』は知っていても、そんな物語を多くの日本人は知らないはず……。『僕の祖国はどこ？』という主人公の根源的問いかけには胸を締めつけられるし、母親との再会を願う切ない気持ちも十分同感できるはず。こんな映画を観て勉強すれば、日本人も少しは島国根性から脱することができると思うのだが……。



これは知っているはず——『出エジプト記』

日本人は仏教やキリスト教は多少理解できても、ユダヤ教、イスラム教、ヒンズー教、道教などはほとんど理解できない国民……。しかし、キリストの誕生や彼が行った数々の奇蹟の物語は、古くは『キング・オブ・キングス』（61年）や『偉大な生涯の物語』（65年）、そして新しくは『パッション』（04年）等の映画でよく知っているし、エジプト王から追われたユダヤの民がモーゼに導かれてエジプトを脱出した物語は『十戒』（57年）でよく知っている……。チャールトン・ヘストンとユル・ブリンナーが敵対する兄弟役を演じた『十戒』における、海が割れる大スペクタクルシーンは記憶に新しいところ。しかし、『約束の旅路』の冒頭に流れる「あなた方を鷺の翼にのせて」～『出エジプト記』より」の文章は、聖書に親しんでいない日本人は、ほとんど知らないのでは……？

知らないことばかり その1 ファラシャ

ファラシャとは、古代よりアフリカ大陸の東部にあるエチオピア（『ラストキング・オブ・スコットランド』で有名になったウガンダのすぐ北東）北部ゴンダールの山中に、ソロモン王とシバの女王の末裔として生活しているユダヤの民。モーゼの『十戒』を観ても、ナチス・ドイツによる迫害の姿を見ても、私たちはユダヤ人は白人だとばかり思っていたが、実はエチオピアに黒人のユダヤ人がおり、それがエチオピア系ユダヤ人、すなわちファラシャということだ。彼らの起源は未だ謎で、有力な2説があるとのことだから、興味のある方はプレスシートやインターネット資料で是非勉強を……。彼らは太古の昔から、聖地エルサレムへの帰還を夢見ており、それが何千年も口授されてきたというからすごい話……。この映画を監督・原案・共同脚本したラデュ・ミヘイレアニユは、1958年ルーマニアのブカレストに生まれ、1980年チャウシェスク政権のルーマニアを逃れてフランスに移住し、映画の道に進んだ監督だが、彼は「ロサンゼルス映画祭でひとりのエチオピア系ユダヤ人の男性と出会い、ファラシャと呼ばれるエチオピア系ユダヤ人が、このイスラエルへの帰還作戦において“エキストラ／端役”として扱われていたことを理解しました」とのこと。そして、彼が監督に語った自身の波瀾万丈の人生が、この映画製作の原動力になったとのことだ。

興味深いのは、ファラシャの歴史はファラシャの起源神話、つまりファラシャがソロモン王とシバの女王の末裔だという説が健在で、その神話が聖書に属しているということ。そんな話、今までちっとも知らなかったなあ……。

知らないことばかり その2 モーセ作戦

「イスラエル」という国は第二次世界大戦終了後、アメリカの支援によって成立したユダヤ人の国。そしてモーセ作戦とは、エチオピアに住むファラシャ＝エチオピア系ユダヤ人の間で長年言い伝えられてきた彼らの神話を実現させ、イスラエルへ帰還させるべく1984年11月から1985年1月にかけて、イスラエルとアメリカの指揮下に実施された大規模な移動作戦。当時、エチオピアはメンギストウ率いる親ソビエト政権で、移民は禁じられていたから、エチオピアからの出国は

まさに命がけ。まずはエチオピアを密かに脱出して、スーダンの難民キャンプまでひたすら歩き、スーダンで順番を待って、イスラエルが用意した飛行機に乗って、イスラエルへ入国するという手順。しかしこのモーセ作戦は、ひたすら歩く旅における飢えと病気、そしてスーダンではユダヤ人であることが発覚した場合の襲撃や拷問その他によって、救出された8千人のうち4千人が命を落したとのこと。1984年といえば、日本では中曽根内閣の下で民活・内需拡大の路線が始まり、数年後のバブルの頂点に向かって走り始めていた時代。そんな時、こんな歴史的な大事件があったとは、今までちっとも知らなかったなあ……。

主人公の根源的問いは……？

この映画の主人公は、9歳になるそんなファラシャ＝エチオピア系ユダヤ人のソロモン（モシェ・アガザイ）……ではない。実はソロモンと実母（マスキィ・シュリブゥ・シーバン）はキリスト教徒のエチオピア人だったが、エチオピアから長い長い道のりを歩いてやっと到着したスーダンの難民キャンプからは、エチオピア系ユダヤ人だけが飛行機に乗ってイスラエルに移動することができるため、ソロモンはファラシャを装って出国した……。それに協力したのが、つい数日前に幼い息子を亡くしたばかりのエチオピア系ユダヤ人の女性ハナ（ミミ・アボネッシュ・カバダア）。つまりソロモンは、ハナの息子を装うことによって、ハナと共に飛行機に乗り込むことができたのだが、実の母親は……？

ハナと共にイスラエルに降り立ったソロモンだったが、厳しい移民局での審査の中、彼はまずソロモンというエチオピアの名前を捨て、ユダヤ人的なシュロモという名前にさせられたうえ、親兄弟の名前や生い立ちを含めて自分の出生をすべて秘密とし、エチオピア系ユダヤ人になりきらなければならないことに……。そんな彼が、以降この映画全般を通じて問いかけるのは、「僕の祖国はどこ……？」ということ……。島国に閉じこもっている日本人にはこんな国際的な問題点はわかりにくいですが、それを少しでも知ろうとしなければ……。

3番目の母は……？

9歳のシュロモは、スーダンの難民キャンプで実母と切り離されたばかりか、

やっと到着したイスラエルでも、母親代わりとなったハナが病のために死亡してしまうことに……。ところが、シュロモは何とも幸運なことに、3番目の母親ヤエル（ヤエル・アベカシス）のみならず父親ヨラム（ロシュディ・ゼム）まで得られることになった。既に実の長女・長男2人の子供を持つヨラムとヤエル夫婦だったが、ラスト近くになって判明するところによると、ヨラムがシュロモを養子に迎えることを強く希望したのは、エジプトからイスラエルへ移民してきた人物を父に持ち、政治的な立場としては平和主義を唱える左派に属していたため。といっても、私にもよくわからないのだから、政治に無関心なあなたには、トンと理解できないかも……？

宗教、政治、食事そして差別……

シュロモはもともとキリスト教徒のエチオピア人だが、今はエチオピア系ユダヤ人を仮装しているからユダヤ教徒……。他方、養父ヨラムは左派に属しているだけあって無宗教らしいが、シュロモとヨラムの家族とのご対面が、まずそういう立場の説明や食事のあり方の説明から始まるところが興味深い……。また、イスラエルとパレスチナとの対立を中心とする政治的問題点は複雑すぎてなかなかわからないが、この映画では1993年のオスロ合意など重要な背景事情について説明してくれるから、少しはラク……。さらに、アメリカにおける黒人差別はよく知っているものの、イスラエルにおける黒人差別の様子も興味深い……？

これら個々のテーマについては、プレスシートにある解説を含めて、いくら勉強しても十分ということはないのだが……。

壮大な叙事詩の展開をタップリと！

この映画は、9歳の時から「祖国とは？」と問い続け、別れた実母との再会を願いつけるシュロモを主人公とした壮大な叙事詩。幼年期の主人公と青年になった主人公を2人の俳優が演ずる映画はたくさんあるが、この映画は幼年期、少年期、青年期の3代のシュロモを3人の俳優が演じているところがユニーク。

いくら素直で勉強がよくできる我慢強い男の子であっても、自分の出生の悩みを抱えて生きる中、父親に対する反抗期などの時期があったのは当然。そんなシ

シュロモが、さまざまな節目において心の師と仰いだのが宗教指導者のケス・アムーラ（イツァーク・エンドガー）で、この2人の会話はこの映画の重要なポイント。

他方、ラブレターを代筆するシュロモの文才にホレ、黒人との交際を認めない父親の猛反対をはねのけて、10年間もシュロモとの結婚を望んだのがサラ（ロニ・ハダー）。そんな中、シュロモは医者になる夢を抱いてフランスへ留学し、見事ドクターとなったが、いよいよ一人前の男となった彼は、これからどのように生きていくのだろうか……？ この映画が描くそんな壮大な叙事詩が、2時間30分にわたって展開されていくから、それをタツプリと味わってもらいたいもの。

サラとの結婚は？ そして実母との再会は……？

映画後半のハイライトは、シュロモとサラとの恋愛ドラマだが、これは韓流純愛ドラマのような甘っちょろいものではなく、人種問題、宗教問題そしてシュロモの出生の秘密が絡んだきわめて複雑なもの。すごいのは、サラが10年間もシュロモを待ったこと。もっとも、彼女の「告白」によれば、その間1人、2人との浮気はあったよう（？）だが、両親・家族のすべてを捨ててシュロモとの結婚にこぎ着けたのは立派なもの。ところが、妊娠したという喜びを告げたその日、シュロモから「実は僕は……」と重大な秘密を打ち明けられたのだから、サラはたまらない。そんな2人の「純愛」の行方が、この映画後半の大きなテーマ……。

他方、ドクターとなってフランスからイスラエルへ帰国しようとしたシュロモを、フランスに留まれと勧めたのがケス。それは、ユダヤ人と偽ったエチオピア人が訴えられて大きな社会問題になっていたため。そこで、シュロモが再びつぶやいたのが「ケス、僕の祖国はどこ？」ということだが、その答えは容易に見つかるものではなかった……。

そして今、シュロモは医師としてアフリカの難民キャンプの現場に。自分の祖国を探すため、イスラエル兵士となって戦闘に参加し、負傷したこともあったが、彼はやっと今自分の働き場所を見つけたよう。そんな彼は、別れた実母とアフリカの地で再会することができるのだろうか……？ この映画には、どんな感動的なラストシーンが待っているのだろうか……？

2007(平成19)年3月9日記